

崔貞熙 —小説家への道のり—

山 田 佳 子

Choe Jeong - hui -The way to a novelist-

Yoshiko Yamada

1 はじめに

解放後の韓国文学界において数多くの業績を残した作家、崔貞熙は作家活動を始めた1930年代当時、その肩書きが記者であった。主として『三千里』の記者として活動していたが、同時に三千里社の雑用もこなした¹。また、当時のジャーナリズムは女性作家に小説よりも随筆の執筆を求めていた²。そのため崔貞熙は小説家になることを望みながらも、文章を磨き、独自の主題と手法を見出して小説を書くような余裕は持てなかった。植民地末期には京城中央放送局³に勤めた時期もあり、いわゆる御用新聞である『京城日報』や『毎日新報』にも多くの記事や随筆を書いた。本稿では、このような崔貞熙の記者としての足跡を辿りながら、崔貞熙が小説家の地位を築いていく過程をさぐる。

2 執筆状況

保母として日本へ渡り、一年ほど滞在した崔

貞熙は帰国後の1931年、三千里社に入社する。保母から記者への転身である。崔貞熙はもともと文芸への関心が深く、女学校時代には詩を書いて新聞に投稿したこともあった⁴。しかし名門の淑明女学校を卒業すると、中央保育学校へ進学して保母の資格を得、幼稚園に就職した。それは父のいない家庭を支えるためであった。

『三千里』におけるデビューは1931年10月号であり、「初めてのご挨拶」⁵という短い挨拶文を書いている。しかしそれより前、安碩柱の依頼により『朝鮮日報』に随筆を書いた⁶。この原稿依頼について作家はのちに、当時は随筆というものが何かもわからずに、他人の書いたものをまねて創作した、と打ち明けている⁷。文章の修行からのスタートであった。

筆者がこれまでに把握している崔貞熙の解放前の執筆状況を表1に示す。記事には書評、取材報告、訪問記を含み、随筆には書簡形式、日記形式のものも含んでいる。記事と随筆の区別

表 1

年	記事	随筆	未見	小説	その他
1931	3	2	2	2	
1932	5	5		4	座談会：1、アンケート回答：2
1933	2	9		3	コント：1
1934	0	0		4	
1935	2	1		0	
1936	0	2		1(1)	座談会：1
1937	1	1		1	座談会：1
1938	1	8		2	座談会：1、コント：1
1939	1	5	3(1)	2	座談会：2、朗読：1
1940	7(1)	11(1)	3(2)	4	座談会：5、「地脈」の日本語訳
1941	6(3)	5(3)	2(1)	3(1)	座談会：1、「静寂記」の日本語訳
1942	2	10(6)	3(3)	4(2)	講演：1

は原則として、客観性の高いものを記事に分類し、逆に主観性の高いものを随筆に分類した。未見の欄には記事、随筆を含め、何らかの資料で存在が確認されているが、筆者未見である文章の数を示した。また、連載ものは随筆、小説とも1作品と数えた。括弧の中の数字は、日本語で執筆された内訳数を示している。

以下、文章の傾向にしたがって四つの時期に分け、それぞれについて詳説する。

(1) 1931年～1933年

三里社に入社した崔貞熙は「初めてのご挨拶」において、「階級分化が急激に進む今、弱々しかったわが国の女性も階級的イデオロギーを持ち、前線で闘うトムのためにわずかでも力を貸そうではないか、そうした内容の記事を多く書いていくつもりだ」⁸と述べ、記者としての決意を表明している。1932年初めにかけて書かれた記事と随筆は階級問題、女性の階級的覚醒、女性の地位や自由についての文章が多い。

「朝鮮女性運動の発展過程」⁹は朝鮮の女性の社会的地位について調べて書いた記事である。「終言」には「もう少し時間があれば女性運動の発展過程を系統的に調査して明瞭に記録しなかったが…」¹⁰とあり、記者として社の要請に応じて努力している様子がうかがわれる。「祈祷する童貞女群」¹¹は天主教修道院の訪問記である。その中の「ジャーナリズムの常套手段として次のように嘘を用いはじめた」¹²という下りを見ると、早くも取材方法を身に付けたかのような印象を受ける。このほか、「文人初印象(二)」¹³という文人訪問記が二回にわたって掲載されている。このとき李光洙をはじめとする、当時の有名作家と初めて対面したようである。

記事の執筆数は1932年初めを境に減少し、次第に随筆へ比重が移っていく。その中には「美しい悲劇」¹⁴など、小説に近い、ストーリー性のあるものも見られる。「訪問・執筆・原稿」¹⁵は記者生活そのものを主題にしている。内容を見ると、「文壇進出を夢見て文人の漫画や写真があれば切り抜いてスクラップし、女性記者になれば文人たちと頻りに会って尋ねたかったことを聞けると思っていたが、それは空想にすぎなかった」¹⁶、「本を読む時間が少なく、書

くことばかりが多い」、「近頃はとくに女性記者に執筆依頼が多い」、「記者生活は歓迎できない」、「一つの職業と割り切るならいいが、この生活では文壇進出はおぼつかない」¹⁷と、記者としての苦勞が打ち明けられている。同様の内容はこのほかの随筆にも見られる。ここには文壇進出を目指す意思がはっきりと表れている。

小説「正当なスパイ」¹⁸は「マルキスト」とそれを支える「私」の話である。しかしこの中では階級問題より、「私」の勇敢なスパイ的行動のほうが強調されており、スリルの感じられる軽快な作品となっている。この時期の小説は批評家から「素材はよいが、それが文学的に生かされていない」と指摘されたように¹⁹、事件の展開に現実性がなく、作為的な印象が強い。実際に「正当なスパイ」は何度も書き直し、先輩作家に見てもらってから発表したという²⁰。

この時期は、階級問題を書いていくのだという、記者としての心構えに忠実に小説の主題を選び、それを他人の作品から借りてきた素材や手法を用いて作品化していた。日本の作家からも多くの要素を取り入れている²¹。ただし、そうした執筆方法を打開し、独自の主題と手法を見出そうと努める様子も、随筆を通して知ることができる。

(2) 1934年～1936年

1934年には記事も随筆も見当たらない。代わりに小説が4篇書かれている。小説家への道を歩みはじめたように見える。しかしその後は執筆数が著しく減少している。これはカップ(KAPF)第二次検挙、いわゆる新建設社事件に関連して全州刑務所に収監されたことによる。執筆された作品の発表時期より、1935年春から秋にかけて収監されていたことがわかる。

「新女性と愛情と貞操観」²²は女性問題を扱っているが、前の時期のような階級問題とは異なり、夫婦のあり方についての記事である。女性に関しての新たな主題と言える。

出獄直後の「女流作家座談会」においては、「大きな悲劇を経験していなくては大きな作家になれない」²³と発言している。全州刑務所での体験を執筆に活かそうとしていることがわかる。実際、翌年に書かれ、自ら処女作とする「凶家」

は、収監中に得た啓示から生まれたものであると回想している²⁴。また、同じ座談会で「金持ちの娘として生まれず、一定の収入のある夫に嫁がなかった以上、家庭生活を破壊しない程度で働くことは致し方ない」²⁵とも述べ、記者という職業を辞められない事情を明かしている。

随筆「春、憂鬱」²⁶は忙しく記者生活を送る日常を描いているが、この中で作家は、子どもから春の歌を歌ってほしいとせがまれ、「世間の人より先に季節に気づかなければならない職務を担っているにもかかわらず、子どもが春を感じていることをなぜ知らなかったのか」²⁷と自分を責めている。こうしたエピソードからもわかるように、崔貞熙は記事、随筆、小説を問わず、自然や季節の描写を意識的に用いようとしていた。しかし階級的な内容の文章においては違和感を醸す場合もあった。

「嫉妬」²⁸は小説の材料を探す主人公を描いた私小説である。1933年には記者生活と作家活動の両立の困難さを主題に随筆を書いたが、「嫉妬」はそれを小説化することによって新たな作品世界を作り出している。

「女人」²⁹は新女性の結婚問題を扱った小説である。この時期の女性作家に期待された主題である。女性作家たちは「女性だけの境地」を開拓することを「女流文壇」を築く手段と考えていた³⁰。

この時期は小説の主題面、手法面ともに、階級問題を借りものの手法で作品化していた前の時期とは明らかな違いが見られる。私小説の手法が用いられるようになるとともに、新女性をめぐる当時の諸問題が主題として現れはじめた。

(3) 1937年～1939年

この時期には、前の時期に減っていた執筆数が再び増えはじめる。発表誌としては『三千里』、『朝光』、『女性』、『文章』などが多い。全体として発表媒体が増加したことが執筆数を増やした要因の一つと見ることもできる。随筆は故郷での少女時代や、女性の生について多く書かれ、「月明かり」など、自然を用いた表現によって感傷性が高められている。

小説「凶家」³¹は崔貞熙自身が自ら処女作とする作品である。これは引越し先を探していた

作家自身の事情を素材にした私小説である。この中で作家はこれまでもしばしば用いていた「月明かり」、「秋」などの語彙に加えて、迷信、仮面、シャーマニズムのクツ堂といった土俗的な装置によって、家は見つけたものの肺炎に苦しめられる主人公の苦悩の様子を効果的に表現している。私小説の形式と作家固有の表現方法が融合して生まれた作品である。

「地脈」³²は、「人脈」³³、「天脈」³⁴と並ぶ崔貞熙の代表作であり、新女性の結婚問題を扱っている。女性作家は女性の問題を書くべきだというジャーナリズムからの要求³⁵を反映している。崔貞熙が好んで用いた自然や季節についての表現が作品に感傷性を与え、女性主人公の生を悲劇的に描くことに成功した。求められた主題が崔貞熙の手法に合致することで生まれた作品と言える。

この時期は処女作「凶家」をはじめ、独自の手法が生み出した作品によって、小説家としての地位を固めつつあった時期である。

(4) 1940年～1942年

前の時期においてすでに記者から小説家への転身を遂げたようにも見えるが、依然として三千里社での仕事も多かった。その活動の様子は文人たちからの書簡を通じてうかがわれる。『物故文人48人の肉筆書簡集』³⁶を見ると、崔貞熙と他の文人たちとの関係を知ることができる。原稿の校正依頼や原稿料の要求などが崔貞熙のもとに寄せられている。また、林玉仁は「文章」の主幹、李泰俊への口利きを感謝する書簡を送っている。ジャーナリズムの世界で、崔貞熙がある程度の地位を築きつつあったことがわかる。

一方、東京にいた金史良は「地脈」を日本語に翻訳して雑誌に掲載する話を持ちかけている。小説家としてもそれなりの評価を受けるようになっていたことを示す。このとき「地脈」は金史良の計画に先駆けて、すでに他で翻訳が進められていた³⁷。

ところで、この時期には京城中央放送局にも勤務していたようである³⁸。ここでどのような仕事をしていたのかは定かではないが、「薔薇の家」³⁹という放送小説を書いていることから、放送作家の仕事をしていたものと思われる。こ

のほか、「君国の母」⁴⁰と題した講演内容が雑誌に掲載されている。いずれも時局と関連した内容である。

この時期は日本語による執筆が次第に増えるとともに、内容も時局的なものが多くなっていく。「『真実』で勝て」⁴¹は、「朝鮮文士部隊」総勢38名で志願兵訓練所を訪れたときの所感を述べた文章である。「京城日報」の記事には、「朝鮮文人協会幹事」の肩書きが見られる⁴²。このとき崔貞熙は朝鮮文人協会に属する歴とした小説家の立場にあったのである。

「野菊抄」⁴³は日本語小説である。この作品の女性主人公は既婚男性と結ばれて息子を授かるが、結局はその男性に捨てられたという過去を持つ。しかし主人公は軍国少年の息子に諭され、息子を立派な軍人に育てることを自分への戒めと受け止め、息子を戦場に送り出す決心をする。この小説は実際に訪問した志願兵訓練所の様子が下敷きになっている。

この時期の崔貞熙は文壇に顔の通じた作家として、その存在感は小さくなかったと思われる。しかし植民地末期における執筆活動は日本語による親日的作品へと傾いたのである。

3 おわりに

崔貞熙は記者として文壇との関わりを持ちはじめ、記者生活をしながら小説を書かねばならない困難と闘いながら小説家の地位を築いた。解放前に書かれた朝鮮語による最後の本格的な小説は「天脈」である。「天脈」は新女性と既婚男性の出会いと別れ、子どもの養育をめぐる問題を描いており、「地脈」や「人脈」とともに女性主人公の貞節を主題としている。しかし描き方において「天脈」は他の二つとは異なる点がある。それは何かと言うと、「地脈」と「人脈」では女性主人公の生が自らの力ではどうすることもできない運命として描かれているのに対し、「天脈」では悲劇的な要素が消え、作品の最後で主人公が自らの過去を振り返り、新たな生き方を模索する姿を見せていることである。すなわち作家は女性主人公の不幸の原因を外部に求めるのではなく、女性自身の内部に求めていると解釈できるのである⁴⁴。

この点で「天脈」のモチーフは、日本語小説「野

菊抄」と一致する。「野菊抄」は志願兵訓練所が下敷きとなっている作品であるが、同様に「天脈」の主人公に見られる変化は、執筆前年に作家が実際に訪れた孤児院で得た感銘によるところが大きい⁴⁵。すなわちこのときに園児たちの成長の様子から作家が得た感銘が、利己主義を超えた生き方の模索として「天脈」の主人公に反映されたと考えられるのである。このように考えると、「野菊抄」は表面的には親日小説であっても、真の主題は、すでに「天脈」に表現されていたものを、再び形を変えて表現したにすぎない。つまり作家は一つのモチーフを「天脈」と「野菊抄」の全く異なる二つの小説に書き分けたと考えられるのである。

「天脈」のモチーフは新たな主題を予感させるものであった。女性主人公が模索する新たな生き方とは何であったのか。しかしその答えは皮肉にも日本語による時局小説の中から読み取る以外に方法がない。崔貞熙が小説家としての地位を確固たるものにしかけた時期がまさに植民地末期だったからである。一般的に、解放前の崔貞熙の作品世界は「女性の運命的な不幸と悲劇に対する嘆息と諦念」⁴⁶であると言われているが、植民地末期における執筆活動の偏向は、崔貞熙本来の作品世界の理解に障壁となった。今後、この点を考慮に入れながら、解放後の作品を丁寧に検討する必要があると考える。

~~~~~

<sup>1</sup> 崔貞熙はのちに三千里社の主幹、金東煥と内縁関係になる。「私と〈朝光〉〈三千里〉時節」(나와 〈朝光〉〈三千里〉時節、『崔貞熙文集』、『明書苑』、ソウル、1977、p.288、289)によれば、金東煥は金銭に無頓着で、帳簿すら付けていなかったようである。崔貞熙はそうした事務的な業務を助ける必要もあったと思われる。

なお、本稿に引用する朝鮮語の作品名は、本文中には日本語で記し、注に原文を記す。引用文については、日本語訳のみを本文中に示す。日本語訳はいずれも筆者によるものである。

<sup>2</sup> 崔貞熙「一九三三年度女流文壇総評」『新

- 家庭』1933.12、p.47。
- <sup>3</sup> 朝鮮最初の放送局は1927年、朝鮮総督府の許可の下に開設された「京城放送局」であり、理事長は日本人であった。放送内容は厳しく検閲を受け、植民地政策の円滑な遂行に利用された。「京城中央放送局」の名称は1933年の第二放送開始以降、朝鮮全土への放送網拡大とともに、1935年9月に変更された名称である。植民地末期の放送内容は、日本の軍国主義を鼓吹する軍歌、講演、日本語講座などが主流を占めた（『韓国民族文化大百科事典』第9巻、p.234、235）。
- <sup>4</sup> 崔貞熙「直線、単線の記録 - 私の十年間の生活」（直線、單線의 記錄 - 나의 十年間 生活）『新東亜』1933.1、p.87。
- <sup>5</sup> 崔貞熙「처음 잊는 인사」『三千里』1931.10、p.121。
- <sup>6</sup> 『朝鮮日報』1931年7月7日付に「夜の都市のプロフィール」（밤都市의 프로필）という随筆が掲載されたことになっている（徐正子「日帝強占期韓国女流小説研究」淑明女子大学校大学院博士学位論文、1987、p.195）が、同紙の同日付に崔貞熙の文章を見つけることができなかった。しかし同紙8月14日付に「港口」という随筆が掲載されており、『三千里』に先立って書かれたものがあったことは確認された。
- <sup>7</sup> 崔貞熙「私と〈朝光〉〈三千里〉時節」（前掲）、p.277。
- <sup>8</sup> 崔貞熙「初めてのご挨拶」（前掲）、p.121。
- <sup>9</sup> 崔貞熙「朝鮮女性運動의 發展過程」『三千里』1931.11、p.94。
- <sup>10</sup> 同上、p.96。
- <sup>11</sup> 崔貞熙「祈禱하는 童貞女群」『三千里』1931.12、p.79。
- <sup>12</sup> 同上、p.79。
- <sup>13</sup> 署名は「女記者」となっているが、目次には崔貞熙とある。なお、「文人初印象（二）」という題目の記事は『三千里』1932年2月号と3月号にあり、2月号のほうが（一）の誤りではないかと思われる。
- <sup>14</sup> 崔貞熙「아름다운 悲劇」『新女性』1932.8、p.102。
- <sup>15</sup> 崔貞熙「訪問・執筆・原稿」『新家庭』1933.1、p.31。
- <sup>16</sup> 同上、p.32。
- <sup>17</sup> 以上、同上、p.33。
- <sup>18</sup> 崔貞熙「정당한 스파이」『三千里』1931.10、p.118。
- <sup>19</sup> 李無影「女流作家概評」『新家庭』1934.2、p.53。
- <sup>20</sup> 「女流作家座談会」『三千里』1936.2、p.227。
- <sup>21</sup> 下村千秋の作品からの影響が指摘されている（洪九「一九三三年度女流作家群像（続）」『三千里』1933.2、p.73）。
- <sup>22</sup> 崔貞熙「新女性과 愛情과 貞操觀」『三千里』1935.3、p.156。
- <sup>23</sup> 「女流作家座談会」（前掲）、p.225。
- <sup>24</sup> 崔貞熙「私の文学生活自叙」（나의 文学生活自叙）『白民』1948.3、p.47。
- <sup>25</sup> 「女流作家座談会」（前掲）、p.233。
- <sup>26</sup> 崔貞熙「苦、憂鬱」『現代朝鮮女流文学選集』、朝鮮日報出版部、京城、1937、p.330（初出は『芸術』1936年2月号であるが、筆者未見である）。
- <sup>27</sup> 上掲書、p.331。
- <sup>28</sup> 崔貞熙「嫉妬」『新女性』1934.1。
- <sup>29</sup> 崔貞熙「女人」『中央』1934.12。
- <sup>30</sup> 「女流作家座談会」（前掲）、p.220。
- <sup>31</sup> 崔貞熙「凶家」『朝光』1937.4。
- <sup>32</sup> 崔貞熙「地脈」『文章』1939.9、p.37。
- <sup>33</sup> 崔貞熙「人脈」『文章』1949.4、p.2。
- <sup>34</sup> 崔貞熙「天脈」『三千里』1941.1（p.232）、3（p.286）、4（p.270）。
- <sup>35</sup> 崔載瑞「女性・文学・家庭」『女性』1938.2、p.26。
- <sup>36</sup> 金英植（編）『작고문인 48인의 육필서한집』、미니ョン、ソウル、2001。
- <sup>37</sup> 金史良は『モダン日本』へ「地脈」の翻訳を載せることを考えていたが、すでに赤塚書房の『朝鮮文学選集』第二巻への掲載が決まり、翻訳が進んでいた（上掲書、p.116、117、120参照）。
- <sup>38</sup> 上掲の書簡集では、崔貞熙に出された書簡の宛先が1942年8月のものは「貞洞中央放送局」となっている。李庸岳からの書簡には、『放送之友』という雑誌が出たらしいが、自分も執筆者なのだから一冊送ってほしい、

稿料も出るのならもらいたい、という要求が書かれている（上掲書、p.140）。

- <sup>39</sup> 崔貞熙「薔薇의 집」『大東亜』1942.7、p.145。
- <sup>40</sup> 崔貞熙「君国の 어머니」『大東亜』1942.5、p.96。林鍾国はこの記事を1941年12月27日に行なわれた「朝鮮臨戦報国団決戦婦人大会」における崔貞熙の講演、「軍国の母」（軍国の 어머니）の内容であるとし、『大東亜』の記事の題目も「軍国の 어머니」として論じている（林鍾国『親日文学論』、民族問題研究所、ソウル、2003、p.133、416参照）。題目の違いは『大東亜』に掲載する時点での変更によるのか、或いは林の勘違いであり、実際は別の講演の内容なのか判断がつかない。当時、同様の内容の講演や座談会は盛んに行なわれていた（宮田節子『朝鮮民衆と〈皇民化〉政策』、未来社、東京、1997、p.16、17参照）。
- <sup>41</sup> 崔貞熙「『真実』로 이기라」『三千里』1940.12、p.36。
- <sup>42</sup> 『京城日報』1940年9月3日付の崔貞熙による記事「明滅燈 赤木蘭子禮讃」の末尾に「朝鮮文人協會幹事崔貞熙」と記されている。
- <sup>43</sup> 崔貞熙「野菊抄」『国民文学』1942.11、p.131。
- <sup>44</sup> 拙稿、「崔貞熙の短篇小説研究 - 『天脈』を中心に -」（『朝鮮学報』第170輯、1999.1）参照。
- <sup>45</sup> この訪問については、「香隣園を訪ねて（香隣園을 찾아）」（『三千里』1940.12、p.126）に書かれている。
- <sup>46</sup> 趙演鉉『韓国現代作家研究』、セムン社、ソウル、1981、p.185。

（本稿は、2004年10月18,19日に台北、中国文化大学で開催された「第7回環太平洋韓国学国際学術大会」において筆者が発表した、同名の朝鮮語論文「최정희, 소설가의 길」に若干の加筆、修正を行なったのち翻訳したものである）